

地域社会の“共有地”づくりとしての生涯学習

—「知の循環」に必要なもの

菊 池 龍三郎

(茨城大学名誉教授)

1. 「知の循環型社会の構築」とは何か

この数年間に、グローバル化する世界での競争力強化と、持続可能な社会の構築という二つの課題に対する教育の役割を明確に打ち出した重要な用語が出現した。「知識基盤社会の構築」と「知の循環型社会への転換」である。

グローバル化は科学技術の面でも世界的規模での競争を激化させ、「知識基盤社会 (knowledge-based society)」の構築を迫っている。しかし、そこで起こるパラダイムの転換と「新しい知」の創造¹⁾は、主に高等教育の課題ではあるが、生涯学習にとっても無関係ではない。即ち、高等教育には高度で革新的な知の創造が期待されるのに対して、生涯学習にもその普及・一般化と共に、特に社会の発展への活用という役割が期待されている筈だからである。答申は、ここで求められる知識を、狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、及び他者との関係を築く力等、豊かな人間性を含む「総合的な知」とする。この総合的な知は、おそらくは臨教審以降の学校教育改革における新しい学力観やいわゆる PISA の学力観、さらに生涯学習運動が期待する生涯にわたって学び続ける力などと同じ系譜に属する力であ

と思われる。

一方、平成17年の諮問「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」に対する20年の中教審答申が目指すものは、「持続可能な社会」の構築である。答申は、持続可能な社会の構築には「循環型社会」への転換が必須であるとする。そして循環型社会を「各個人が社会の構成員として、人間・社会・環境・経済の共生を目指し、生産・消費や創造・活用のバランス感覚を持ちながら、それぞれが社会全体の活力を持続させようとする社会」と定義する。そして生涯学習の役割は、この転換のために、誰もが学習した成果を社会に還元し、社会全体の持続的な教育力の向上に貢献する「知の循環型社会」を構築することであり、そのことが持続可能な社会の基盤をつくることにつながるとしている。この趣旨からすれば「知の循環型社会」という新しい社会像には、「知識」という言葉よりも、社会的実践への志向性をニュアンスとして感じさせる「総合的な知」の方がより適しているとの認識があったのではないかと推測される。

2. 知識は社会への参加—持続可能な社会が求める力

(1) 持続可能な社会とは知が循環する社会

本来、生涯学習論には、「教え合い、学び合い」という表現に示されるように、学習とは垂直的な関係での伝達—受容というより非権威的・水平的関係での相互学習であるとのニュアンスが内包されていた。これは生涯学習の社会改革的な性格と言ってもよいと考える。持続可能な社会の構築という問題提起の根底にあるのは環境問題の深刻化だけではない。少子高齢化や過疎問題と関わって、絆が希薄化し安全・安心な社会への自信が持てなくなっていることへの危機感もまた強い。それを受け、社会的な統合を維持しながら持続可能な社会への転換を図るためには、生涯学習には、これまで以上に学習の成果を社会的に役立てることへの期待が強まっていると見るべきである。つまり、学習の成果の活用を通して持続可能な社会への参加が求められているのである。従って生涯学習における循環の意味は、ひとつには学習→応用・実践→次の学習への新たな動機付けといった循環であり、もうひとつは個人

的な学習→フォーマル・インフォーマルな組織化を伴う学習活動→社会改革への活用としての協働→より大きな動機付けを伴う学習への発展という循環である。なおこの循環は、社会的問題の解決に要するコストの削減にも寄与する。

(2) 求められる知識の性格

しかし、知識の社会改革的な役割を強調するためにあえて「知」という言葉を使わなくても、知識という言葉には社会的協働の意味が含まれていた。例えば「知識」という言葉には、いくつかの意味に交じって「寄進すること、また、その人たち」(『広辞苑』)という意味が載っている。実際、知識を社会への参加・参画と捉える例は古典的な仏教説話などにもしばしば出てくるものである。次は、播磨靖夫氏が『知縁社会のネットワーキング』⁽²⁾の中でも取り上げている好例である。

今昔物語集巻第卅一の二の「鳥羽の郷の聖人等、大橋を造りて供養せし話」である。一人の聖人が橋が壊れたため往来する人々が皆河を歩いて渡らなければならないことを嘆き、難儀している人々を助けるために、広く諸々の人々に呼びかけて「知識」ということをして橋を渡したという話である。

ここで言う「知識」とは、普通我々が「知識」という言葉から連想する意味とは違い、おそらくは「寄進すること、また、その人たち」の意味であろう。つまり、何かしら社会的に意味のあることのために、誰もがそれぞれに合った形で協働するという意味である。聖人は皆のために橋を造りたいとして誰もが何らかの形で参加するよう呼びかけた。これが「知識」を行うということなのである。これに応じて多分、忙しい商人はお金を出したかも知れない。働き手のある家ではお金の代わりに男手を出したであろう。男手の無い家では女が出て作業場で飯炊きをやったかも知れない。働き盛りの男手も女手も出せない家では年寄りが出て作業場の掃除や片付けをしたかも知れない。こうして橋はできたが、聖人は人々の力を結集する役割を果たし、呼びかけに応じて里の住人たちが、自分にできることを通して橋造りに参加した。これらも「知識」をするということのもうひとつの意味なのである。言い換えると、そもそも知識とは社会への参加・協働であって実践的行動的性格を持つものなのである。

(3) 相互依存性のタペストリー—知の循環型社会に必要な個人の意識

先にも述べたように、答申は、「知が循環する社会」は「教育力が持続」する社会であり、そのためには誰にも「共生」を目指した「バランス感覚」を持つことを求めている。しかし、一般にはそれらの課題全体のつながりを一人ひとりの役割や責任の問題にまで引き寄せながら理解することは簡単ではない。それには、我々が所属している様々な社会システムが相互につながっていることを理解できなくてはならないのである。その上で初めて、答申が「共生」の実現のために期待する「バランス感覚」を持つことも可能になる。つまり、知が循環する社会の構築には、学習者にはこれまでとは異なる意識、例えばボランティア活動に取り組む人々と同じ意識を共有することが求められる。その意識とは何か。金子郁容氏の言葉を借りれば、それは我々の社会が「相互依存性のタペストリー」であることを常に意識することであり⁽³⁾、同時に、人と人を結合させるためには、我々が「加害者であって同時に被害者でもありうるという意識」、つまり自らを「バルネラブル (vulnerable) (傷つきやすい、弱みがある)」な存在であると自覚することなのである⁽⁴⁾。従って社会の中で知を循環させるためには、生涯学習には単に学習の成果の積極的な活用を強調するだけでは不十分である。学習を通して誰もが社会の相互依存性とバルネラブルな存在としての自己認識を共有できるよう方向付けることが益々期待されている筈である。

3. 知の循環型社会とソーシャル・キャピタル

(1) ソーシャル・キャピタルへの注目

近年、昭和50年代以降話題になってきた「地域の教育力」、あるいはそれよりも意味の広い「地域力」という言葉に関心が集まっている。特に「地域力」は、いわゆる「新しい公共」を具体化する概念セットのひとつである「ソーシャル・キャピタル」(「社会的資源」)を簡潔に言い換えた言葉として俄に注目されてきている。

ソーシャル・キャピタルの概念は色々に語られるが、「社会問題に関わっていく自発的団体の多様さ」とか「社会全体の人間関係の豊かさ」を意味する

概念で、「地域力」、「社会の結束力」と言う人も少なくない。それは「人々のつながり(社会ネットワーク)やそれが生み出す信頼や互酬性の規範といった不可視的な諸資源を総称する“傘の概念”」⁽⁵⁾であり、協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高める信頼、規範、ネットワークなどの社会組織の特徴を示すものであるとされている。最近明るみになった所在不明の高齢者問題に象徴されるように、高齢化社会を支える人間同士の絆がいつの間にか失われていることから、改めてこの「人々のつながりやそれが生み出す信頼や互酬性の規範」という“不可視的な資源”としてのソーシャル・キャピタルの形成と持続が、いかに切実な課題であるかが理解できる。

一方、ソーシャル・キャピタルは、たとえ諸々の“不可視的な資源”の総称であるにしても、「資源」である以上は指標化される必要がある。例えば、住民が地域の組織・団体に加入して活動する頻度、投票率、ボランティア活動への参加率、友人や知人とのつながりとしての様々なサークル・団体活動への加入率、社会への信頼度等が例示されている。そして、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域は、政治的コミットメントの拡大、子どもの教育成果の向上や、近隣の安全・安心など治安の向上、地域経済の発展、地域住民の健康状態の向上など、経済面社会面においても好ましい効果をもたらしているとも言われる。地域コミュニティとソーシャル・キャピタルの関係を提起した R.バットナムは、ソーシャル・キャピタルを高める要素として、住民の自発的で水平的な交流活動によるコミュニティが重要であるとして、合唱団、読書グループなどとともにスポーツの効用などもあげていると言う⁽⁶⁾。

明らかに、ここにソーシャル・キャピタルの形成に関わる生涯学習の役割が示唆されている。言い換えれば、住民の生涯学習の活動状況如何で、あるいは生涯学習が変わればソーシャル・キャピタルの状況は違ってくるということである。例えば、生涯学習への参加率が高くなればなるほど、多分、地域の現状への関心が高まって地域ボランティア活動への参加が増え、また子どもの成長・発達の場合としての家庭・地域への関心も高まって、子どもによりよい環境をつくり出そうとする自主的地域活動に参加したり、町内会・自治会などの身近な自治的組織への参加も増え、それからさらに地域の政治や行政への関心が高まり積極的な参画につながるのではないかという期待である。これらは、地域住民同士の信頼、規範、ネットワークの形成にも役立つ。

つまり、生涯学習の成果は、ソーシャル・キャピタルの増加に役立つという希望につながるのである。無論、これには前提条件がある。学習者には、学習を通して、前述した「相互依存のタペストリー」の認識と「バルネラブルな意識」が深まり学習者間で共有されてきていることである。

最後に、生涯学習による知の循環型社会の構築とは、どういうイメージなのかをソーシャル・キャピタルの観点から述べておきたい。

表1はソーシャル・キャピタルを「内部結束型」と「橋渡し型」の二つに分類したものである。知の循環型社会は、この中の特に「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルに位置づけられ、生涯学習は、地域の中に様々なインフォーマルな交流（つまり、「橋渡し型」のソーシャル・キャピタル）を形成するという役割を担っていることが分かる。そして、こうして新たに組織された様々のインフォーマルな組織・集団の効果は、福祉を支えるシステムを例に取って言えば、それを支える自助－共助－公助のシステムの中の「自助」と「共助」の部分強化する役割に相当する。これにより、例えば膨張する「公助」の部分のコストの抑制にもつながる。それは例えば福祉を支える全体システムの崩壊を食い止め、社会を持続可能にする筈である。

さらに、「信頼」、「規範」、「ネットワーク」というソーシャル・キャピタルの3つの要素は、我々の社会がその多くを失ってしまったものであるが、これは、社会が社会であるための不可欠な存在基盤である。生涯学習は決して個人が時間とお金を消費して行い、その成果も個人に戻ってくるだけの活動に終わってはならないのである。それは金子氏の表現を借りれば、社会が社会であるためにも不可欠な「共有地」(commons)⁽⁷⁾をつくる営みに他ならないのである。言い換えれば、住民の心理的・社会的・人間的絆の集積部分をつくり出す営みであると言ってもよい。

表 1 内部結束型と橋渡し型の違い

性質	Bonding／内部結束型 (例：民族的ネットワーク)	Bridging／橋渡し型 (例：環境団体)
形態	フォーマル (例：PTA, 労働組合)	インフォーマル (例：バスケットボールの試合)
程度	厚い (例：家族の絆)	薄い (例：知らない人に対する相槌)
志向	内部志向 (例：商工会議所)	外部志向 (例：赤十字)

(出典：内閣府『ソーシャル・キャピタルー豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』の p. 18より作成されたものを以下の文献(5)より転載)

引用文献

- (1) 国連「持続可能な発展のための教育の10年」2005年～2014年
- (2) 播磨靖夫『知縁社会のネットワーキング』柏書房 1986年 68-69頁
- (3) 金子郁容『ボランティアもうひとつの情報社会』岩波新書 2010年 85-86頁
- (4) 金子郁容 前掲書 111-112頁
- (5) 金子郁容・玉村雅俊・宮垣元編著『コミュニティ科学ー技術と社会のイノベーション』勁草書房 2009年 39-44頁
- (6) 金子郁容他編著 前掲書 87頁
- (7) 金子郁容他編著 前掲書 105-108頁